
らき すた～だらだらいふ～

達磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた〜だらだらいふ〜

【Nコード】

N6224S

【作者名】

達磨

【あらすじ】

変な名前の陵桜学園高等部新1年生がお馴染み「らき すた」メンバーとなんとなく絡んだりするなんかそんな感じのお話。

何にでも始まりはある〜1年生4月〜（前書き）

あきら「らっき〜 ちゃんねるう〜」

みのる「さあ、まさかの本編より先に始まってしまいましたこの「
ーナー。パーソナリティは無敵のすう〜ぱあ〜アイドル!〜皆様お
なじみこの御方!〜!」

あきら「小神あつきらでえ〜すう!〜!」

みのる「そして、あきら様のアシスタント、しらいしみのるです」

あきら「……………ハア」

みのる「…?あれ?どしたんですかあきら様」

あきら「ほ〜んぺんよりさきにはじまったてさ〜、いみねっつうの」

みのる「は…?はあ」

あきら「なんてゆ〜の?かいごろし?てきな?」

みのる「そんなことは…」

あきら「あ!〜!そーいえばあんた!〜!まあたほんぺんでるってまあ
じ?」

みのる「……………いやまあその…」

あきら「じょーだんじやないわよ！ーしらいしごときがでれてなん
であたしがでねんだよ！ーまたしても！ーせきにんしゃでてこい
やゴルア！ー！」

みのる「…しごときって」

あきら「み〜んな〜 あきらがほんぺんにしゅつえんするにはみん
なのちからがひつようなのお あきらさまがほんぺんでみた〜いつ
ていうみんなのあつう〜いおもいをハガキでい〜っぱいおくって
ぶりい〜ず」

みのる「………そ、それではまた次回、お会いしましょう」

あきら&みのる「「ばいばい」」

あきら「あのね」

みのる「はい?」

あきら「あんたメインのはなしまであるっつうの、まあじ?」

みのる「うっ、ぶ、ぶ、ぶ、そのは(ryy」

何にでも始まりはある〜1年生4月〜

「ワタシが君らの担任の桜庭だ、まあヨロシクたのむ」

おいおいなんなんだこのちみっこいヒトは？アレが先生だと？一体何の冗談だ。

「む、そのオマエ」

やべ。

「今、なんか失礼なコトを考えていただろ？」

いやいやいや。

「……………まあいい、ついでだ、そのまま自己紹介しろ」

いきなりかよ。

「あ〜上中下もんどです。かみなかしも変な名前ですいません。あ〜趣味は得に無し、平々凡々、人間万事塞翁が馬。平和に暮らしたいです」

ま、それは大嘘なんだが。

「ご両親は時代劇が好きなのか？」

「ええ、両方とも。ちなみに兄はまたはまたはちろっ、弟はばいあんで名前です。あ〜わかるヒトだけわかっただけわかって下さい」

「…つむ、徹底してるな。次は…そのオマエだ」

桜庭センセに名指しされた生徒達がぼつぼつと自己紹介を重ねていく。

この春、なんとか無事に合格し、晴れて俺はここ私立陵桜学園高等部の1年生となった。

「柊 かがみです。えーと趣味は…」

中学生の頃は、なんつーかその、パツとしない3年間だった。

高校に入って心機一転!!なんて考えるのはまあ、自然な流れだろ?

「日下部みさおダ。よろしくたのむぜ!!」

具体的には今までの人生でもっともパツとしない恋愛方面に少し力を入れてみたい。

高校生にもなりやそりゃ、人並みに恋のひとつもしたくなるわけで。

しかしだ、そう望む俺自身に大きな問題があるんだなこれが。

「峰岸あやのです。…」

なぜかと言えば…俺はオタなのだ。

何にでも始まりはある〜1年生4月〜（後書き）

こなた「出番がないよ!！」

つかさ「（；；）」

次回、「待ちガールはいただけない」

待ちカ〇ルはいただけない〜1年生5月〜(前書き)

あきら「らっつきー ちゃんねるう!!--」

あきら「おはらっつきー!!--さあ、ほんぺんよりさきに!!--ほんぺんよりさきに!!--ほんぺんよりさ・き・に!!--はじまりました!!--パ
ーソナリティのかんぜんむけつのすう〜ぱあ〜アイドル!!--小神あ
きらでっっす!!--」

みる「アシスタントのしらいしみるです」

あきら「さてさてさっそくおたよりいってみましょう。しらいしさ
〜んおねがいします」

みる「はい、え〜北海道の十勝カマンベールさんからおたより
です。『分を弁える』ってステキな言葉ですよね。脇役は所詮脇役
図にのっちゃいけません」

あきら「……………」

みる「……………」

あきら「つ、次、いきましよう。愛媛県のボンジュール・ボンジュ
ーさんからおたより「ビックリマンじゃねえんだから」オマケ
”がでしゃばんじゃねえゾ”

あきら「……………」

み の る 「……………」

み の る 「…つつつ次は…東京都の黒いひよこさんからのおたより」
実写とか、マジ、ねえから。正直イラツとどころか殺意すら芽生え
ます」

あ き ら 「……………」

み の る 「……………」

あ き ら 「……………」

み の る 「……………」

番組P「2人が動かないので代わりに、ばいにく」

あ き ら 「……………」

み の る 「……………」

待ちガ〇ルはいただけない〜1年生5月〜

「む？あれは…？」

実力テストも終わり、まだまだクラスにぎこちなさが残っていたりもする5月の下校中。

駅前にて妙なモノを発見。

（あれはウチの制服だよな…？）

陵桜の制服を着た、綺麗な藤色のショートカットに黄色のリボンの女の子が何やらオロオロしている。

その子の目の前には、身長2メートルはあろうかという屈強な外人さんが立っていて何か話しかけていた。

緑のタンクトップ、迷彩柄のパンツにブーツ、金髪を潰れたほうきみたいに逆立てている。

…どこかで見たことがあるような気がするが…まあ気のせいだろう。

俺に外人の知り合いはいない。

（何やってんだ…？）

なんとなく気になって近付いてみると、どうやら外人さんが英語で道を尋ねていて、女の子の方が英語がわからなくて困り果てている、ってことらしい。

周りを歩く連中は巻き込まれまいとスルーを決め込んでいる。

ちっ、薄情な世の中だぜ、ったく。

(……………!!)

…おいちよつとまてよ…?…キタ!!キましたよコレ!!あれじゃ
ん!!フラグですよコレ!!ここであの女の子を助けるワケですよ
コレ!!それすなわち出会いのフラグゲットですよコレ!!

俺の頼りない英語力でも道案内ぐらいなら単語の寄せ集めでなんと
かなるぜ!!最悪直に案内しちまえばいいんだし!!

イケル!!イケますよコレは!!…瞬く間に欲望の打算を働かせた
俺は即行動に移す。

「Hey, M…」

俺が外人さんに話し掛けた瞬間、蒼い疾風が頭上を飛び越えた。

「チエイサーッ!!」

「な?アレはっ!?!」

めくりジャンプ大キック!! 近距離大パンチアッパー!! 大・
昇・〇・拳!!

ホレボレしちまう程の古式ゆ〇り…じゃねえ古式ゆかしき連続技!!

ピヨる外人さんに追い打ちでもうワンセット決めてK・O!!

うむ、見事だ……………ってちょっとまてえええい!! 貴様
!! 何しやがんだゴルア!!

「ちょ!?! おま!?! 何いきなりめくりアパ昇決めてんだよ!?! しか
も2回!?!」

「ん?」

俺の言葉に振り返ったのはこれまた陵桜の制服を着た、ぱつと見小
学生と見間違えちまうんじゃないかって程に小柄な女の子だった。

膝まで伸びた蒼いロンゲに頭頂部のアホ毛、気ままでやんちゃな小
動物系の顔にはこころなしかやり遂げた感じのいい笑顔が浮かんで
いる。

「いや、修得するのに苦労したよ。めくりジャンプ大キックは
ね、足刀の方じゃなくてたたんである方の足の膝で鎖骨をえぐるん
だよ。腕上がらなくなるから空きのボディに…」

「そんなコトはこれっぽっちも聞いちゃいねんだよ!! 道を尋ね
ているだけの外人さんに対して凶行に及んだ理由を50字以内で簡
潔に述べなさい!! 今すぐ!! 貴重なフラグつぶされて俺涙目デス
ヨ?」

何か動転して言わなくていいコトまで言っちゃまった気がするが、ア
ホ毛付きロンゲ、略してアホロンゲに突っ込みを入れる俺。

「え? あれ? いやだってなんかガ〇ルっぽいのにクラスメートの子

が襲われてたから助けようと…あれ？違うの？」

ヤツの頬に流れる汗一筋。

目の前でおきたありえない展開に固まっちまってるショートカットの子にアホロンゲが視線を向ける。

そこでようやく再起動を果たした彼女がわたたししながら説明しました。

「ちがうよお、道を聞かれただけえ」

「ナンデスト！？…マジデスカ！？」

「うん、でねえ、道を聞かれていることはわかるんだけどお、どこに行きたいかもわからないしどう答えていいかもわからないから困っちゃってえ…えへへ」

ショートカットの子のほんわか癒し系ボイスにしばし和む俺。

しかし現実には冷たく厳しいモノ…依然としてソレはソコにあるのだ。

「…んで？どうすんだよコレ」

サムズアップをひっくり返し、親指で地面に大の字かつ白目むいてぶっ倒れている哀れな外人さんを指し示す。

「あーっー…」

「ど、どうしようねえ…」

頬を流れる汗の雫を増加させるアホロンゲ。

オロオロするばかりのショートカットの子。

さつきから無視してたが、突き刺さるような周囲のギャラリーの視線もイタイ。

突っ込みを入れた時点で俺も関係者の一人だもんな。

……仕方あるまい、ここはアレでいくか。

「………さる某家の伝統的な戦いにおける発想法を使うとしよう」

「……!」

俺のセリフにピンときたらしいアホロンゲがセットアップ!!

俺、180度回転!!同じくセットアップ!!

「……?どうするのぉ?」

一人わかってないショートカットおいてけぼり!!しかし放置!!

生き残りたいなら置いてかれないようについて来い!!

「『逃げる』んだよオオオオオツ!!!!」

全力でダーツシュ!!

「ええええええっ!?!」

オオオオ戸惑うショートカットの子を置いて俺とアホロンゲは走る
走れば走るとき!!

「ままま、まっつてええつ!!」

ちよつと涙目になりながらショートカットの子も走り出す。

が、遅いなあ…あ、転んだ。

ひよつとして運動音痴なのか？

「ねえねえキミさ、なんて名前？」

アホロンゲがけっこうなスピードで並走しながら俺にそう聞いてくる。

「…1年C組上中下もんど」

「カミナカシモモンド？ヘンな名前だね」

「ほつとけ!!んなこたあわかってるよ!!…そつちは？」

「1年B組泉こなた」

隣のクラスの子だったのか…。泉こなたさんね…覚えところ。

「ところで上中下くんや」

「ん？」

「キミから同類の二オイがぶんぶんするワケですが…?」

それは俺も感じてたコトだ。

『逃げる』の時の反応を見て確信を得た。

探してた同類がまさかこんな形で見つかるとは…しかも女の子だけ?

「まあ…間違っちゃいないよ」

「ふむ、やはりそうであったか」

ペースを少しずつ落としていって歩きに切り替える。

線路沿いの一本道だからそのうちショートカットの子も追いつくだろう、…多分。」

「キミが狙ってたフラグ潰したのは悪かったけどさ、その代わりに2人に増えたってコトでどうだろうねひとつ」

「こんな騒がしくて風情のないフラグ立ては御免こうむる!!」

「いやいや。どんなカタチでもフラグはフラグじゃん?大事にしとけば発展するかもよ?」

ふむ。まあ一理あるといえないこともない。

「ひー、ふー、ひー、ふー、ゲホッゲホッ、や、やっと思いついたよあ〜」

汗だく涙目でショートカット到着。

「お疲れ〜。同じクラスの柘さんだよな？」

「ひー、ふー、ふー…。う、うん、ひー、そだよ、ふー、柘、つかさだよっ」

柘つかささんね…記憶にメモメモ。

まあとりあえず息を整えようぜ、ほら深呼吸深呼吸。

「びつくりしたよお〜いきなり走りだすんだもん」

「ははは」

柘さんが落ち着くのを待ってから、俺達はそのままひとつ先の駅目指して歩きだす。

柘さんとも自己紹介をすませ、さっきのことをネタに話しながら歩いてくと歩き続ける。

何気なしに観察してみたりするワケだが…あれ？何か2人ともかなりカワイクね？

おいおいおいーじゃないの！ーいーじゃないの！ー幸先絶好調って感じ？

泉さんのセリフじゃないけど、大事にしましょうこのフラグ！！

「あれえ？上中下くんは反対方向なんだ」
駅に着いた俺達は改札を出たところで二手に別れる。

「だね。んじゃ二人とも、縁があつたらまた会おうな」

「隣同士のクラスだもん、きつと会えるよお」

「さらばだ同士よ」

「バイバーイ」

泉さんはズピシツと敬礼を決め、柊さんはやわらかく手を振ってくれた。

何気ないことかもしれないけど、こんな風に友達的な感じで女子と別れの挨拶を交わすのは初めての経験だ。

ちょっと緊張して頬が赤くなってるだろうことが自分でもわかる。

泉さん？そのニヤニヤ笑いやめれ、ガツペム力つく。

「じゃ」

シユタツと手を上げて照れ隠しにホームへ小走り。

向かい合わせのホームでまた手を振ってくれたりしつつ調度同時にホームに入ってきた電車にそれぞれ乗り込む。

やべえ、なんかニヤニヤが止まらない。

いかん、いかんぞ、これじゃ不審者丸出しじゃないか。

……ああ、ダメだ、頬が緩むの止めらんねー。

待ちガ〇ルはいただけない〜1年生5月〜（後書き）

ななこ「ウチらの出番はいつなんかな？」

ゆい「このぶんだとそーとーさきなんじゃないですかね〜」

みゆき「うぶぶぶぶぶ（怒）」

次回、「梅雨時の過ごし方」

いしくん、誹謗中傷なんかには負けないでください。』らっきーちゃんねる』を、お二人の活躍を、ずっと、ずっと応援しています！
！っーかあきら様激ラブです！！」

あきら「！..！」

みる「あきら様」...

あきら「.....ふ」

みる「あの.....」

あきら「.....ふふふ」

みる「あきら様？」

あきら「ふつかあーっ！..みんなのすうぱあ〜すうぱあ〜すうぱあ〜ア・イ・ドル！..小神あつきらでえ〜す！..！」

みる「おお！..あきら様！..それでこそあきら様ですよ！..！」

あきら「これからもガン！..ガン！..！..いっちゃいますんで、みくん
な！..！..よっろっしっくね〜！..！」

あきら&みる「」ばいにー！..！」

番組P (…意外とチヨ口かったね!!しらいしくん!!)

しらいし (いや、まさかあんな簡)ry

梅雨時の過ごし方〜1年生6月〜

今、俺は危機を迎えている。

感じるぜ、ヤツの気配を…。

コイツを奪われる訳にはいかねえ、守りきってみせる…!

今日はどちらから来る…？右か…？左か…？

神経を研ぎ澄まし…襲撃に備える…!

「あまいぜ、かみなかしもオ…!」

机の下からいきなりにゆいっとヤツが現れ、

「何いっ…!下からだとおおっ…!」

プラスチックの二本の牙を容赦なく突き立て、疾風のごとくかつさ
らう…!」

「日下部え〜俺のハンバーグ〜」

「もぶあもぶあばは（まだまだナ）…!」

ちよつとクセのあるショートカットに、口元に光る八重歯がお茶目
な無駄に元気な娘日下部みさお、現在超咀嚼中。

今日の我が弁当の目玉、俺謹製ハンバーグは日下部の胃袋の中へ消

えた。

昨日の晩から…イロイロ仕込んで…作ったのに…。

「なくなよかみなかしも。ホレ、ミートボールやるからサ」

コロン、と俺の弁当箱の中に転がり込んできたのはバリバリ市販品のミートボール。

…しかも1個だけ。

「これで日下部の16連勝か」

「しつかりしろよもんどろ。俺はお前に賭けてんだぜ？」

机合わせて俺と一緒にメシを喰ってる連中は、日下部とのおかずの取り合いで賭けをしてやがるらしい。

友情ってヤツあ、はかないモノなんだなあ。

…コトの始まりは、ささいな話だ。

俺達のグループと日下部のグループが教室でメシを喰う場所がたまに近くて、食い物に関して鼻の利く日下部に俺の弁当が目をつけられちゃった。

俺のところは両親が共働きで、2人とも結構遅くなる。

だから兄貴と交代で掃除、洗濯、メシや風呂の支度なんかをこなしているってワケだ。

で、弁当も自分で作るんだが、慣れっつのは恐ろしいモノで、こんな俺でもそこそこの味の料理を作れちまうんだなコレが。

たしか、俺謹製から揚げがメインの弁当の時のコト。

「うまそーなニオイさせてんじゃねーか」

と言いつつ覗き込んできた日下部に、よせばいいのに妙な仏心をだしてから揚げを1つやっちまっただ。

日下部はずいぶんとお気に召したようで、それからこっち必ず俺の弁当を覗いて、めばしいおかずをねだりやがる。

数がありや別に構わないが、ひとつしかないおかずの場合は当然俺も断るワケで。

だが日下部のヤツあ、俺が女の子相手に強気に出れないのをいいコトに無理矢理かつさらっていくようになった。

…ヒドくね？

てなワケで俺は悪魔の手から愛しきおかず達を守るため、日々戦い続けている。

「あはははは！ーいつもいつも災難ねえ、アンタも」

いやいやいや、笑って見てないでたまには助けてくれよ姉様。

藤色の腰まであるロンゲを、リボンをあしらったツインテールにし

ているちょっとキツめの顔立ちの娘、柊かがみさん。

同じ名字なんでもしやと思って聞いてみたら、この間知り合った隣のクラスの柊つかささんの二卵生双生児の姉だとか。

二卵性とはいえ双子なのに、まったく正反対の性質を持っているから人間ってのは面白いモンだな。

「ホント、いつもゴメンね？上中下くん」

いやいやいや、アナタに謝られても困りますよ峰岸サン。

オレンジのさらさらストレートヘアを白いヘアバンドで纏めたいつも穏やかなおっとりした娘、峰岸あやのさん。

日下部と家が隣同士で、いわゆる幼なじみってヤツなんだそーだ。

この3人、中学の頃からずっと同じクラスの、姉柊いわく腐れ縁。

「ウフフフ、コマツナノオヒタシトエノキバタートイツコダケノミートボールノヘルシーベントウニハヤガワリ。クスクスクス」

「あ、上中下が壊れた…」

「あーもう仕方ないわね、ホラコレあげるから」

姉柊からアスパラベーコンの差し入れ。

「じゃあ、わたしも…ハイコレ」

峰岸さんからはささ身と梅肉のシソ巻き揚げの差し入れ。

「うつつありがてえ…アンタたちあつたけえよ…」

「よかつたじゃねえかかみなかしも。コレもアタシのオカゲだナ！」

……………貴様…。

「日下部エエツ！！そこになおれイツ！！世のため人のため！！今日こそ貴様を成敗してくれるわーッ！！」

掃除用具入れから取り出した丁字ぼうきを正眼に構える俺。

「おもしれえじゃねえカ。かえりうちにしてやんヨ」

日下部も丁字ぼうきを上段に構える

「ちよ、やめなさいよアンタ達！！埃が舞うでしょーが！！」

姉柎の制止の声も耳に届かない。

これまで無惨に散っていった我がおかず達の恨み…今こそ晴らさん！！！！

「どうりやあつー！！」

「でやあつー！！」

始まるチャンバラが教室を阿鼻叫喚の地獄絵図に変えていく。

男子は噤し立て、女子は呆れて眺めていて。

「せめて外でやれー!!」

「んもう、みさちゃんたら。でも意外、上中下くんってあんな風にはしゃいだりするのね」

自分でも驚きだ。

こんな自分がいたなんて、中学の頃の俺だったら想像もできないだろう。

なんでなんだろうなコレは。

んー…ま、いいや。

「……………とじろでね」

「何だ姉柊!!今は忙しい!!」

「ジャマすんなよひいらぎィ!!」

罅せり合いのさなか心底呆れたような顔で姉柊がつぶやく。

「よく考えたらさ、お弁当のフタ、閉めればいいだけの話じゃないの?」

「」「……………あ」「」

外はうつとうしい梅雨の雨だけど、そんな憂鬱な雰囲気をぶっ飛ばすように馬鹿やってる俺達だった。

梅雨時の過ごし方〜1年生6月〜(後書き)

ゆたか「わたし達はいつでるんだろ？」

みなみ「まだ…泉さん達1年生だから…」

みゆき「うふふふふふ(怒怒)」

次回、「なぜかおいしい」

なぜかおいしい〜1年生7月〜（前書き）

あきら「……………」

みる「……………」

あきら「……………」

みる「……………」

あきら「……………」 オイ

みる「……………」

あきら「……………」 オイ

みる「……………」 なん…………… でしょうかあきら様

あきら「……………」 どーゆーことだ

みる「……………」 なにが…………… ですか？

あきら「……………」 76にち……………」

みる「……………」 ハイ？

あきら「76にちかんもほったらかしにしてどーゆーことだっつてんだよー！すう〜ぱあ〜あいどるのこの小神あきらさまにー！い〜どきようしてんじゃね〜かゴルァー！せきにんしゃどこにいた

でてこいモルアー!」

みる「おおおちついて下さいあきら様!」

あきら「……かえる」

みる「ええっ!?!だ、ダメですよちょっと!?!あきら様!?!あきら様!?!……っ、とりあえず……ばい」

みる「まったく……あきら様にも困ったもんですね……。……え?ボクですか?ボクはホラ、メンチカツ揚げたりイベントの司会したり充実した日々を(r)y

なぜかおいしい〜1年生7月〜

「ねえ…上中下？」

ある日の放課後。

かったるい教室の掃除を終え、用具入れに我が愛刀でもあるT字ほうきを仕舞っていると、姉柊が声をかけてきた。

昼休みに毎度毎度繰り広げられる俺と日下部の”俺の弁当のおかず争奪戦”のおかげで口をきくようになり、最初は『三人（姉柊・日下部・峰岸さん）まとめてフラグゲットオオオッ』などと無駄に喜んでた俺だが、現実はそのなにかねえワケで。

”クラスメートの男子の一人”という認識の壁はなかなか越えられないもんじゃないらしい。

ちなみにあれほど強烈なインパクトのある出会いフラグであったにも関わらず、”見知らぬ外人さんにアパ昇事件”で知り合った泉さんや妹柊とも、見かければ軽く挨拶し少し会話もするものの、主に俺がチキンである（やっぱり恥ずかしいしクラスの男子に誤解でもされたら面倒臭い）が故に、特に親密度は上がっていない。

そんな現状においてこのように女子から声をかけて頂けるのはなかなかレアなイベントなのである。

他のクラスメート共はさつさと教室去り、いつも姉柊といっしょの日下部と峰岸さんも何故か今日はいない。

つまり教室には姉柊と俺の二人きり。

おお？これはアレですか？『…ねえ？い、いつしよに帰らない？』
とかもじもじしながら俺を誘ってくれたりするんでしょうか姉柊様
！！ここでまさかの下校イベントゲット！？

妄想じみた、自分に都合のいい何かを期待しつつ振り返った俺は、
姉柊の顔が視界に入った瞬間全身に悪寒が走るのを感じた。

「…！？」

アレ？…なんですか…そのニヤニヤ笑い。

「上中下…」

「…ハイ？」

「見ちゃったのよねえ、アタシ」

「ナ、ナニヲデスカ？ヒイラギサン」

意地の悪そうな笑顔であさつての方向を見ながらつぶやく姉柊。

これはアレだ！！アホの目下部をうりうりとイジメている時の姉柊
”イジメっ子モード”！！

「この間の土曜日にね？偶然…」

…あー…まさか…”アレ”を見られたのか？

もったいつけてその先を言わない姉柎を見つめながらゴクリと唾を飲む俺。

しばし溜めを作った姉柎は一度俺をチラ見すると核心を突く。

「見ちゃったのよ、アニ〇イトに入っていくアンタを」

あちゃーやっぱりか。

「普段のアンタは”そんな”風に全然見えなかったから意外だったわねえ〜」

ぐむう…。

隠すつもりだったのかと言われるとそんなつもりは無かったんだが、”同志”がクラスに皆無であり、かつ”彼女を作りたい”などという大それた無謀な野望を持ってしまったが故に、俺はこのクラスで自分がオタであることはいまだにカミングアウトしていない。

タイミングずれの^{カミングアウト}和平交渉が何になる。

ま、欺瞞だとわかつちやいるが、ギレンの野望的な何かがある俺をチキンにし、カミングアウトをためらわせた感は否めないかな。

なんののかんの世間様で認知度が高まり、極一部の世界では”COOL”なんて言われてもいるらしいが、所詮オタはオタ。

まだまだ一般的にはマイナスファクターと認識されると俺は思っている。

で、なんとなく今まで”普通の男子”的な上辺を取り繕っているような形になっちまったが、ここここに至ってはその必要もない。

「ありゃ、見られちゃったか。まあそっだよ、俺はアニ○イトに出入りしちゃうようなオタである!!」

胸を張り、両手を腰に当て仁王立ちしながら無駄に堂々と宣言する俺。

「え？アンタオタクなのを隠してるんじゃないの？」

一方、毒気を抜かれたかのように呆ける姉柊。

「別に？このクラスにや”同志”がないからな。なんとなく表面に出す機会が無かっただけだよ」

ま、それだけじゃないけどね。

さすがにもう一つの事情は話せないよな。

「あれ？そーなんだ」

「なんだよ姉柊、俺がオタだったのを隠してたとしたらどーするつもりだったんだ？」

ちよつと反撃してみようかな？…せつかくの貴重な会話イベントだしな!!

「え!?!いやあ…そのえ」と

ナニコレ…思惑が外れてわたわたしている姉柊が可愛いぞチクシヨウめ。

「よく話すクラスメートの男子の意外な一面を知っちゃってさ。なんかよくわかんないけど…今、アンタとアタシだけだったし、ちょっとだけ…からかってみようかな…なんて…」

ナニソレ…バツが悪くててれてれしている姉柊が可愛いすぎるぞドチクシヨウめ。

ああこのままお持ち帰りしてえー!!

何か上目づかいだし!!ちょっとほっぺ染めてるし!!

「まあ…実はアタシにアンタをからかう資格はないのよね」

……………ん？

「アタシもさ、ラノベだけはよく読むのよ。あ、でもラノベだけよ？ラノベだけだから!!あとは…まあちょっとくらいならゲームとかもするけどさ…ウチで。…それだけだから!!」

なにやらぺらぺらとカミングアウトしだす姉柊。

しかもこの台詞まわし…この娘…ツンデレ属性があるのか!?

「あの日アタシもアソコにラノベの新刊買いにいったのよね、そして…」

「俺がいたと」

「うん」

「ふうんそっか、姉柊がね」

正直意外だったな、マジで。

勝手な印象だけど一番有り得なさそうだったからな！。

成績優秀だし、委員長だし。

ラノベみたいなる意味”軽い”本は読まないと思ってたよ。

ちょっと嬉しくてニヤニヤしてしまう。

「何よ…そのニヤニヤ笑い」

「え、さっきまでは姉柊もニヤニヤしてたじゃん」

「う…ま、まあそうだったわね」

なんかよくわかんないし、こんなことだけで判断するのも失礼かもしれないけどさ。

いい娘だよな、姉柊。

なんつーかその、根っこのところからとゆーかなんとゆーか。

この会話イベントでほんのちょっぴりでも距離が縮まったならいいんだけどな！。

「…ん？なんだオマエら、まだ残ってたのか？部活に入っていないヤツはとつとと帰れよ？」

ここでちみっこい我らが担任桜庭せんせい登場。

「あ、ハイ！！すみません帰ります！！」

慌てて鞆を引つつかむ姉柊。

名残惜しいが、この会話イベントはここまでだな。

いやはや素晴らしい一時だったぜ！！

余談ではあるが、この後バス停　バス内　駅までの道中、成り行き上姉柊と一緒に帰るといふ夢のようなシチュだったわけだが、チキンぷりを遺憾無く発揮した俺は無意味にガチガチに緊張していたため何を話していたかも全く覚えていない。

下校イベントは今の俺にはまだ早いか…くむう。

なぜかおいしい〜1年生7月〜（後書き）

ひより「もうちょっとネタになりそーなハナシの展開を希望するっ
ス!!!」

パティ「マダムダアマイネ!!!」

みゆき「うふふふふふふふ（怒怒怒）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6224s/>

らき すた～だらだらいふ～

2011年10月8日04時02分発行